奎吉

梶井基次郎

青空文庫

「たうとう弟にまで金を借りる様になつたかなあ。」と奎吉は、一度思ひついたら最後の後悔の幕迄行つて見なければ得心の出來なくなる、いつもの彼の盲目的な欲望がむらむらと高まつて來るのを感じながら思つた。

彼にとつてはもうこうなればその醜い欲望が勝を占めてしまふに違ひなかつた。彼は彼で祕かにそれを見越して、それを拒否する意志の働くのを斷念する傾きが出來てゐたのだつた。

彼は今金がつかんで見度くて堪らないのであつた。然し正當の手段でそれをこしらへるめどは周圍のどこにもなかつた。

彼は兩親から金を持つことを許されてゐないのであつた。どうして奎吉がそんな破目になつたかと云へば、それは彼の様な性格の人間には當然な經緯（いきさつ）の結果なのである。

——彼は二度續けて落第したため、最近迄籍をおいてゐた高等學校を追はれた。

あらゆる徳目と兩立しない欲望が、又しても又しても彼のちつぽけな意志を押し流した。彼の理想や彼の兩親の願望の忠臣である彼の意志なるものはあまりに弱かつたのである。彼はその度に後悔し誓つた。然し回を重ねるにつれて、放埒の度は段々はげしくなつた。結局彼は引き摺られる所まで引き摺つてゆかれたのだ。——そして彼は學校を追はれたのだつた。

「お父さんも今度といふ今度は本當に憾つてゐらつしやる。」と奎吉は母に云ひきかされた。

「お前の心が改まつたとわかるまで家へ置いてお小遣をやらないと云つてるからお前もその積

りでゐなさい。それから將來の身の振方も考えてお置き、家ではもう學校へはやらない積りでゐるから。」奎吉は然し「はい。」とは返事が出來なかつた。が、彼の自由になる金が途絶えた生活は續けられて行つた。

然し彼はそろそろ金が欲しくなつて來た。彼は毎日散歩と稱して、息詰る様な家の空氣から逃れ出た。然し金を持たずに街を歩くのは彼の憂鬱を増させるばかりであつた。

そしてその生活の二十日目程にあたる今日といふ今日は金のことばかりで思ひわづらつてゐた。賣つたり質屋へ持つてゆくものは何一つ見當らなかつた。あつても到底五十錢銀貨一枚つかめそうになかつた。そして最後に弟の貯金のことに不圖氣がついた時、彼はもう矢も楯もたまらなくなつた。

非常に卑しいことだと心に否定しながらもその欲望に身を委せてしまふ時、人はこの奎吉の様な感じを抱くのであらうか。何にせよ奎吉はそのとき變な感じを經驗したのである。それは單に感じに止まつてゐたのであつて、何らの成心も必然其處に働いてゐたのではない様であるが、私は其處に人間が自分の卑しさを庇はふとする意志が、感ぜられないながらも働いてゐるのではないかと思ふ。事實それは（せめてこの感じがする様なら俺も眞から卑しくはないのだ）と自分自身に斷りを云ふことが出來るその證據になるのだから。

兎に角奎吉がその堪らなく嫌なことをやらうとした時、（いよいよ俺はやるな。）——何だかそこに第二の奎吉といふものがあつて本來の奎吉には何の申譯けもせずにそれをやり通す、

そして本當の奎吉は傍からそれを眺めてゐるといふ様な想像がふと起つたのである。

彼の弟であるその荘之助は彼の父の外妾の子なのであつたが、その女は荘之助の十歳程の時死んでしまつたのを父は彼を自分の家へ置いて早く一人前にさせて、荘之助の祖母にあたる人間を養ふことが出來る様にしてやらうと思つて兄弟の仲間入りをさせたのである。

然し誰も彼もが不完全であつて、家の中は父が空想してゐた様な調和がとれなかつた。そして誰も彼もが自分の狹量や不完全を感じる機會が多かつた。結局不幸なのは荘之助であつた。

荘之助は最近に高等小學校を卒業して、極く少しの間父の知り合ひの店へ見習ひに行つてゐたのだつた。然し病弱でもあるし、當人もあまり氣が進まず、父もそれを可哀そうに思つて又家で紺飛白を着せて遊ばせてあつた。奎吉がふと思ひついたのはその荘之助の金を借りることだつた。

荘之助は最近見習ひに行つてゐた店から歸る時、そこの主人から包み金を渡された。そして彼の貯金には彼や彼の祖母が、幾度も空想してゐた種類の荘之助自身の金が加はつた譯であつた。

奎吉自身としてもそんな貯金から借りるのはどうしてもいやであつた。それに彼が今迄勝手氣儘に押へつけて來た弟にとつて奎吉のその申し出が、輕蔑となつて價ひするだらうとは奎吉は知つてゐた。そして奎吉は苦しんだ。然し此の際奎吉は手段などはどうでもいゝ程金が欲しかつた。その欲望はますます巨大に膨れ上つて、奎吉の良心を窒息させてしまひそうになつた。

彼は非常に氣を重くさせてしまつた。何だか譯のわからないものゝ中にゐる様な氣がした。が、とうとうその欲望が勝を占めた。その瞬間奎吉は第二の奎吉といふ様なものがその醜い行爲をするのを傍觀する様な、そして自分の聲をさへ一方から傍聽する様な空想を起しながら、莊之助に呼びかけてしまつた。

「おい、莊之助、ちよつと。」

そう云つてしまつた時、彼はその聲が非常に不機嫌に重々しく響いたと思つた。

雜誌に讀み耽つてゐた莊之助は、兄の視線の下で、身體を起しながらも、その頁から眼をはなさず、それでも兄のいらいらしてゐる視線にゆきあたつた時、機嫌をとる様な作り笑ひをして近づいて來た。

それが何か用事を云ひつける様な時だと、そんな笑顔などは恥ぢて消えてしまふ程、ますます不機嫌な顔をして、ぶつきら棒に「新聞とつといで」とでも云ふのであるが、奎吉は莊之助の視線に會ふと危く目をそらそうとした。奎吉は何だかもやもやしてゐるものゝ中に閉ぢ込められてゐる様に思つた。然し努めて顔を無表情に裝ひながら、彼の弱味を見られまいとした。

「お前の貯金から少し金を出して來て呉れ。急に入用が出來たんだが、お母さんが今使ひに行つてゐないから。」

彼がやつとそれを云ひ終へた時には、さき程の變に歪められた（この様な事件が今起つてゐるのだな。）といふ想像の氣持が丸切り影を消してゐた。

莊之助は舞臺の上の人物が傍白を云ふ時の様に一度目を横へそらせて「あゝ」と云つてうなづいた。奎吉は不幸にもその時の莊之助の顔に浮んだ微笑の影に、奎吉をなぐさめる様な柔しい感情の表れがあつたのを見逃せなかつた。

その人間にその申し出が拒絶される時の氣不味さを氣遣ひながら、恐る恐る金を貸して呉れと他人に云ふ時に奎吉がいつも顔面に感じたあの堪らなく嫌な顔附きが、奎吉の努力を裏切つて、ここへも出たのではあるまいか、そして莊之助は俺のその顔から、俺の苦痛をヒユーメインにも知つて、あんなに柔しい顔附きをしたのではあるまいかと彼は疑つた。然も彼は莊之助のその顔を生意氣に思ひ、いまいましく感じた。

「お前通帳と認印は自分で藏つてるんだね。ぢや直ぐ行つて五圓出しておいで、そしてこんなこと知れると少し都合が悪いから、俺が返すまで誰にも云ふんぢやないよ。いゝかい。その代り返す時には六圓にして返してやるからな。」

奎吉は最後の醜さを出してしまつた。然し彼はどうしても口止めをせずにはゐられなかつたのだつた。

莊之助はそれを頷きながらきいてゐたが、おしまひに云ひ難くさを切り拔ける様にしてこう云つた。

「何も餘計にして返して貰はうとは思はないけど、確かに返してくれるのだつたら……。」

奎吉は本當過ぎる程本當なそんな弟の言葉には全く參らされた。思ひがけなくも卑しい利息

のことなどを云つたのを、堪らなく恥かしく思つた。金を返すにしても父が呉れる様にならなければどうせ返せないのだし、金が手に入つても右左にそれを返すにはどうしても目をつぶつて自分を麻痺させなければ、惜しくて堪らなくなる自分の性質を省ても、荘之助の言葉は本當過ぎる位本當であつたので。

荘之助が出て行つてから彼は堪らない場面をとと出して見た。そして次には「やつた、やつた」と小聲で云ひながら踊る様な眞似をした。彼はそれでもあきたらなかつた。最後に奎吉は「うー」と云ひながら顔を思ひ切つてしかめた。なほもなほもひどく。なにかその顔面筋肉の收縮の感覺に快感があるかの様に。

青空文庫情報

底本：「梶井基次郎全集　第一巻」筑摩書房
　　1999（平成11）年11月10日初版第1刷発行
入力：高柳典子
校正：小林繁雄
2002年11月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

奎吉

梶井基次郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/